

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04931

研究課題名(和文) 高機能自閉症児における心の理解の二重処理とメタ表象の連関と社会性の支援

研究課題名(英文) Development and guidance on the dual processing of mentalizing and the metarepresentation in children with high functional autism spectrum disorder

研究代表者

別府 哲 (Beppu, Satoshi)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：20209208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：知的に遅れのない自閉スペクトラム症児(以下、ASD児)におけるメタ表象能力を検討するため、工藤・加藤(2014)が考案した多義図形課題を用いた。定型発達児(以下、TD児)は4歳で、2つの現実と2つの表象を付与でき、5歳でメタ表象が可能になるが、言語性精神年齢を一致させたASD児は、4歳ではどちらも正答率が低く、5歳では両者とも正答率が上昇した。ASD児はTD児と異なるメタ表象形成過程を持つことが示された。また、誤信念課題誤答者に「見ることは知ること」を時系列で言語的に確認後、再度課題を行うとTD児は正答に変容するが、ASD児は変容しないことから、心の理論の形成過程にも異質性が指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで指摘されてきた自閉スペクトラム症児者の心の理論の障害について、以下の2点が明らかにされた。心の理論の発達の基盤とされるメタ表象の視点から検討したところ、自閉スペクトラム症児はメタ表象の形成過程と内容にも定型発達児との違いがある。心の理論を測定する誤信念課題において、定型発達児は前提確認を継時的に質問し確認すれば誤答を正答に変容することが可能であるのに、自閉スペクトラム症児は前提確認に正答しても、誤信念課題は正答に変容しないという特異性が明らかにされた。以上はいずれも、自閉スペクトラム症児が定型発達児と異なる質の心の理解を有することを示し、従来と異なる支援方法を要請するものである。

研究成果の概要(英文)：This research found out that the idiosyncratic development of the meta-representation in children with autism spectrum disorder. Children with typical development at 5 years old can acquire the meta-representation on the basis of the two different representation on the two different realities at 4 years old. However, children with autism spectrum disorder at verbal mental age 5 years old can form both the meta-representation and the two different representation on the two different realities.

In addition, Typical development children who cannot pass the false belief task at 4 and 5 years old transform their answers into correct ones through being asked to confirm the successive condition, although it is not true for children with autism spectrum disorder. It suggested the different processes and contents of mentalizing between children with autism spectrum disorder and typical development.

研究分野：障害児者心理学

キーワード：自閉スペクトラム症幼児 メタ表象 心の理論 多義図形課題 誤信念課題 前提確認質問

## 1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症の障害特徴の一つは、心の理論(theory of mind)欠損仮説にみられるように、他者の心の理解の障害にある。一方、近年の実験的研究は、心の理論を含む心の理解にはいくつかのレベルがあること、そして自閉スペクトラム症は、その一部は有しているが他の部分は有していないという障害を持っていることが示唆している。別府・野村(2005)の研究をもとに、別府(2016)は、心の理解に二つのレベルがあることを指摘した。一つは、言語で理由を説明できないが、他者の心を理解した振る舞いを行うことができる直観的心理化(intuitive mentalizing)であり、もう一つは、他者の心を理解した振る舞いができるだけでなくその理由を言語的に命題として述べることもできる命題的心理化(propositional mentalizing)である。障害のない定型発達児は、遅くとも4歳ころまでには直観的心理化を形成し、それを基盤としながら6歳ころには命題的心理化も獲得する。それに対し、自閉スペクトラム症児は、直観的心理化に弱さを持ち続けたまま、言語精神年齢(Verbal Mental Age;以下、VMA)が9歳を超えるところで、命題的心理化のみを獲得する。

この直観的心理化と命題的心理化は、他の研究者によって暗黙的心理化(implicit mentalizing)と明示的心理化(explicit mentalizing)に区分して心の理解を説明しようとする論(Butterfill & Apperly, 2013)とも共通する。直観的心理化にみられる、他者の心を理解した振る舞いは、歩き始める1~3歳のトドラー期にみられる実践的理解(practical grasp)(Dunn, 1988)、直観的他者理解(intuitive social understanding)(Hughes, 2011)とも重なる議論となり、普遍性を持つものと考えられる。

しかし、定型発達児が通常的环境中で一見やすやすと獲得するようにみえる直観的心理化を、なぜ自閉スペクトラム症児は形成できないのか、翻っていえば、直観的心理化とはどのような能力であるのか、については、いまだ説明されていない部分が多く残っている。

上記に述べたように、自閉スペクトラム症児者は、直観的心理化に障害をもったまま命題的心理化のみを形成し、それで他者の心を理解しようとするという把握は、命題的心理化を活用して、他者の心を教える支援を導出する。その試みはいくつかなされており、一定の効果は検証されている。一方で、同じ障害を持つ者同士が自分の悩みや感性を語り、それを批判せず聞いてもらう関係で、一緒に把握の仕方や解決を考える当事者研究(例えば、熊谷, 2018)からは、類似した体験を持つ当事者研究に参加すると、理由を聞かなくても何となく相手の気持ちがわかる体験ができるようになることも報告されている(綾屋, 2013)。この理由を聞かなくても何となく相手の気持ちがわかることは、上記の議論でいえば、直観的心理化による理解に該当する。仮にそうであれば、自閉スペクトラム症児者の直観的心理化の障害は不変なものではなく、他者と気持ちが分かり合う体験、すなわち情動共有経験が保障されると、その結果その相手とは直観的心理化で心を理解することが可能になることを示唆している。定型発達児者は発達早期から半ば自動的に他者との情動共有経験(例えば、一緒に笑い合う)を体験することができる。一方、自閉スペクトラム症児者は、感覚過敏・鈍麻という感覚の特異性や、全体よりも細部に注意の焦点があたる弱い全体性統合(weak central coherence)という認知特徴により、定型発達児者とは異なるものに快・不快を感じやすい。そのため、他者と一緒に笑い合うという情動共有経験がきわめて乏しくなりやすい。自閉スペクトラム症児者の直観的心理化の障害は、情動共有経験の欠如によって作られた障害ということも想定可能なのである。この想定は、自閉スペクトラム症児者に対し、彼・彼女らの個性豊かな、快・不快を感じる情動対象を見出しそれを他者が共有する場を保障することで、彼・彼女らに対し、直観的心理化の発達を可能にする支援があることも予想させる。上で述べたいまだ解決されていない問いの追求は、こういった支援の在り方にも一石を投じるものと考えられる。

## 2. 研究の目的

ここでは、自閉スペクトラム症児における直観的心理化の障害を引き起こす、あるいは関連する要因を明らかにするために、二つの点からのアプローチを行う。

### (1) 心の理解とメタ表象の関連

一つは、直観的心理化とメタ表象(meta representation)との関連の検討である。Perner(1991)は表象を、知覚と同様な一次的表象と、定型発達児が1歳半以後形成する、知覚とは分離した表象である二次的表象、そして4歳ころ獲得する、自己や他者の心的表象を表象として理解するメタ表象にわけ、その発達の变化を論じた。そして、Perner(1991)が、メタ表象を必要とするものとして取り上げたのが多義図形課題である。これは複数の見え方がありうる多義図形を見せ、最初の見え方と違う複数の見え方を答えられるかを問う。複数の見え方を答えられる者は、見え方は図形に対する主観的な表象であること、だからこそ同じ図形に異なる主観的な表象を立ち上げることが可能であることを理解していることが、必要となる。直観的心理化、命題的心理化を含む心の理論を測定する課題である誤信念課題も、この点では同様の構造を有する。誤信念課題では一連の物語を示した後、最後の同じ場面で、登場人物(サリー)はボールが「カバン」にあるという心的表象を持ち(それが誤った信念)、別の登場人物や実験参加者はボールが「箱」にあるという別の心的表象を持つこと、その理解が正答を導くためには必要となるからである。従来の定型

発達児を対象とした研究では、同じメタ表象を必要とする課題として、誤信念課題と多義図形課題が連関する結果を示している。一方、自閉スペクトラム症児者を対象とした研究では、誤信念課題に比して多義図形課題の方が正答しやすい傾向が示されており、両者の関連はまだ確定していない。

加藤・工藤(2014)は、多義図形課題を改変することで、メタ表象の生成メカニズムを解明できる課題を創出した。従来の多義図形課題は、一つの多義図形がまず何に見えるか問い、続けて別の見え方がないか問う、一つの多義図形が二つの見え方があることを、線を足したりして具体的に教示した後でと同じ問いを行う、という二つの方法が主流である。それに対し、加藤・工藤(2014)は、同じ多義図形課題を2枚用意し、1枚をモーフィングの技法を使って多義図形からその一つの見えに変形させ(例えば、「ウサギとアヒル」の多義図形を、モーフィングによって明確に「アヒル」に見える図形に変形する)、別の1枚は同じくモーフィングの技法で明確に別の見え方(ここでいえば、「ウサギ」)に変形させるのを見せる。それぞれ、変形後の見え方を確認した後、2枚の同じ多義図形の一つを見せて「これは何に見える?」、続けてもう1枚の同じ多義図形を見せて「これは何に見える?」と問う【2枚課題】をあらたに付け加えた。併せて、1枚の多義図形課題を最初はモーフィングである見え方に変形させ、その後モーフィングで元に戻した後続けてまたモーフィングで別の見え方に変形させた後、「これは何に見える?」、そして「これは、他に何かに見える?」と問う【1枚課題】を施行した。この【1枚課題】は従来の研究のと同じであり、メタ表象の有無を問うものとなっていると考えられる。一方【2枚課題】は、二つの異なる図形(実際には同じ多義図形2枚)に、異なる表象(見え方)を付与することを求めている。厳密にはメタ表象を必要とはしない。しかしこれを定型発達児に施行すると、【1枚課題】も【2枚課題】も誤答する3歳児に対し、4歳児は【1枚課題】は誤答するが【2枚課題】には正答できるようになり、それが6歳児になると【1枚課題】も【2枚課題】も正答できるようになるという発達的变化を示すことが明らかとなった。従来の多義図形課題は、メタ表象があるか無いか、二分法的な結果しか得られなかった。すなわち、定型発達児は【1枚課題】にみられるメタ表象を形成する前に、【2枚課題】であれば正答する何らかのメタ表象につながる能力を示すということが示されたのである。【1枚課題】は一つの図形に複数の見え方(表象)を付与することを意識化して行わなければならないが、【2枚課題】はそういったメタ表象を意識化する必要が無い。意識化は言語化と関連があることからすると、意識化できないがメタ表象を有する者と同様な行動(同じ多義図形に複数の見え方を付与する)がとれることは、理由を言語化できないが他者の心を踏まえた振る舞いができる直観的心理化と類似すると考えられる。そうであれば、定型発達児が、【1枚課題】も【2枚課題】も不通過⇨【1枚課題】は不通過だが【2枚課題】は通過可能⇨【2枚課題】に加えて【1枚課題】も通過、という発達経過をたどるのに対し、自閉スペクトラム症児は上記の①のプロセスが無い(上記①⇨③)という発達を示すことが予想される。本研究の第一の目的は、この仮説を検証することである。

## (2) 前提確認質問による、心の理論の検討

典型的な誤信念課題であるサリーとアン課題に子どもが正答するには、次の正しい想起や認識が前提として必要である。すなわち、ターゲット対象が「カバン」から「箱」という別の場所に移動したときに、サリーはその場に不在だった、ゆえにターゲット対象の移動を見ていなかった、という2つの事実を想起でき、だから、サリーはターゲット対象が別の場所に移動したことを知らない、という「見ること-知ること」の関連についての正しい理解があり(以下、この三つの問いを前提確認質問と称す) それを知らなければ、元のところを探しに行くはず、という推論が可能でなければならない。

誤信念課題に正答しかつ言語的な理由付けも可能な命題的心理化を示す者は、その理由の多くが上記(「サリーはボール(ターゲット対象)がこっちにいったのを見ていない」)であることからしても、この前提確認質問で問われたことは意識化できており、言語的に理解していると考えられる。一方、誤信念課題に正答できるが言語的な理由付けはできない直観的心理化を示す者は、上記の～の前提確認質問で示される内容を言語による意識化はできていないが、それを踏まえた振る舞いができるようになっていくことが推察される。

一方、誤信念課題を動画で示した際の定型発達児の視線を調べた研究では、最後の誤信念質問(「サリーはボールで遊ぼうと思いました。サリーはどこを探しますか?」)の際に、視線は正答の場所(「カバン」)をより長く注視しているのに、指さしや言語で回答させると誤答の場所(「箱」)を指さしたり回答する誤答者が低年齢児に多いことが示されている(千住, 2018)。これは、誤信念課題誤答者の中に、上記～を振る舞いとしては理解しており、だから正答の場所(「カバン」)に自然と視線を移すが、言語的に「どちらを探すか」と思考すると、実際にボールがあることを知っている場所(誤信念課題でいえば誤答となる「箱」)を回答してしまう者がいることを予想させる。直観的心理化を、他者の心を理解した振る舞いができることとすれば、視線を正答の場所に移しているのに言語的には誤答する者も、直観的心理化を有していると考えられる。そうであれば、この直観的心理化を有する誤答者に対しては、再度課題を提示しながら上記～を言語的に一つずつ確認し、言語的にも①の正答につながることを示せば、再度行う誤信念質問に対しては、正答に変容することが想定される。一方、自閉スペクトラム症児者は直観的心理化を有していないのが特徴であるとすれば、誤信念課題誤答者に、上記～の確認を行っても、

誤信念質問で正答に変容することはみられにくいと予想される。今回の第二の目的は、この仮説を検証することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 心の理解とメタ表象の関連

【実験協力児】A, G 県内の就学前の通園施設に通う年長児 176 名(平均 CA5:9, 平均 DA4:9)。このうち, PARS の幼児期ピーク得点が 5 点以上かつ新版 K 式発達検査の全領域 DQ70 以上(あるいは WISC の Full IQ70 以上)に該当する 118 人を「自閉スペクトラム症傾向があり知的に遅れがない子ども」として抽出した。そしてランダムに『1 枚提示条件』か『2 枚提示条件』に振り分けた。そして言語性 DA により, 3 歳児群 28 名(DA53 ヶ月以下), 4 歳児群 71 名(DA54 ヶ月~65 ヶ月), 5 歳児群 19 名(DA66 ヶ月以上)に分け, 分析を行った。【使用図版】多義図形「アヒルとウサギ(Jastrow, 1900)」を使用。工藤, 加藤(2014)で使用した典型的な二通りの見え(アヒル, ウサギ)のターゲット図形 2 枚と, ターゲット図形と多義図形との間を行き来する動画を 3 種類使用した。

【手続き】工藤, 加藤(2014)と同様の手続きで行った。1 人の子どもに対して同じ多義図形を異なる位置に 2 枚提示する 2 枚提示条件と多義図形 1 枚を提示する 1 枚提示条件を行った。提示はすべてパソコン画面上で行った。『2 枚提示条件』では, 2 枚カードを提示し一方をターゲット図形(e.g.アヒル)へ変更, ターゲット図形が多義図形へ変形する動画提示, 変形後も子どもがアヒルとして見ていることを確認, もう一方のカードも同様に施行(但しターゲット図形はウサギ)。その後 2 枚のカードをシャッフルし, 同じ多義図形を 1 枚ずつ提示し, それぞれが何の絵か尋ねた。『1 枚提示条件』 図の多義図性を子どもに知らせ, 多義図形 1 枚を提示し何の絵に見えるか質問, 次に 多義図形 子どもの回答したターゲット図形(e.g.アヒル) 多義図形 別のターゲット図形(e.g.ウサギ)へ変形する動画を提示 その見えを確認した後で 再び多義図形に戻る動画提示。再度多義図形を提示し 二通りに見えるかどうかを尋ねた。

#### (2) 前提確認質問による、心の理論の検討

【実験協力児】G 県内保育所の年中児 27 名(MA4:9)と年長児 31 名(MA5:9) 及び同県内就学前通園施設の年長児 64 名(平均 CA5:9, 平均 DA4:7)。後者については, このうち, PARS-TR の幼児期ピーク得点が 5 点以上かつ新版 K 式発達検査の全領域・言語・社会性領域・認知・適応領域それぞれが DQ70 以上に該当する 28 名を「自閉スペクトラム症傾向があり知的に遅れがない子ども」として抽出した。

【手続き】実験は個別に行われた。サリーとアン課題(Baron-Cohen et al., 1985)のストーリーを一部改変した「ボールのもんだい」課題(DVD「アニメーション版心の理論課題 ver.2」, 藤野, 2005)をノート PC で子どもに提示し誤信念課題を実施した(以下, DVD 課題とする)。続いて, 課題において信念を問われた登場人物(女の子)に関する以下 3 つの「前提確認質問」を行った。「男の子が赤い箱から青いバッグへボールを動かしたとき, 女の子はどこにいたのかな? 部屋の外かな? 部屋の中かな?」「女の子は外(あるいは中)にいたのなら, 男の子がボールを四角い箱から青いバッグに移すのを見ていなかったかな? 見ていたかな?」「女の子は見ていなかった(見ていた)なら, ボールが赤い箱から青いバッグへ移ったのを知らなかったかな? 知ってたかな?」。この質問の後, 再び他者信念質問「女の子は知らなかった(知ってた)なら, どっちにボールを探すかな? 赤い箱かな? 青いバッグかな?」を行った(以下, 再質問と称す)。そして, なぜ箱(バッグ)を選んだのか理由を尋ねた。

### 4. 研究成果

#### (1) 心の理論とメタ表象の関連

多義図形を二通りに反転させ理解することが可能な反転反応と, 一通りの理解しかできない同一反応に分類した。その結果, 定型発達児においては年中児・年長児でみられた, 反転反応の割合における『2 枚提示条件』の『1 枚提示条件』に対する促進効果(工藤・加藤, 2014)は, この年齢群でもみられなかったが, それぞれの提示条件での反転反応かどうかを年齢群で比較したところ, 『1 枚提示条件』( $\chi^2(2)=6.534, p<.05$ ), 『2 枚提示条件』( $\chi^2(2)=5.640, p<.10$ )で, いずれも年長児で反転反応が有意に多く同一反応が有意に少なかった。より自閉症児も年中から年長にかけて多義図形理解は発達すること, しかし よりそのプロセスと質は定型発達と異なる可能性が示唆された。自閉症児におけるメタ表象形成の視点から, その特異性を検討する必要があると考えられる。

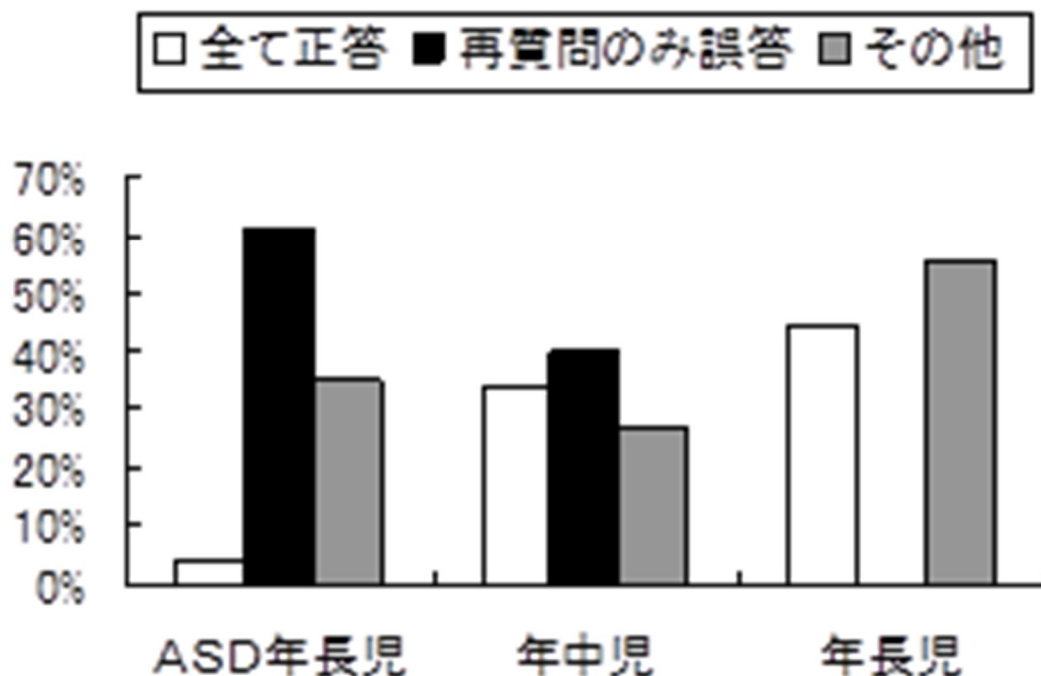
#### (2) 前提確認質問による心の理論の検討

【誤信念質問】誤答児は, 定型発達年中児 15 名(55.6%), 年長児 9 名(29.0%), 計 24 名(41.4%)

自閉スペクトラム症年長児 23 名 (82.1%) であった。 2 検定の結果、自閉スペクトラム症年長児は誤答児が有意に多く、定型年長児は有意に少ないことがわかった ( $\chi^2(2) = 16.76, p < .00$ )。

【誤答児の前提確認質問 + 再質問への回答パターン】可能な回答組み合わせ 16 通りを、次の 3 つのパターンに分類した。①前提確認質問全てに正答 + 再質問にも正答、②前提確認質問全てに正答 + 再質問のみ誤答、③その他。カイ自乗検定の結果、自閉スペクトラム症年長児と定型年長児を比較すると人数分布に有意な差があり ( $p < .01$ )、前者で有意に①のパターンが少なく②のパターンが多かった。自閉スペクトラム症年長児と定型年中児の比較では、有意な差の傾向が見られ ( $p < .10$ )、残差分析の結果、前者で有意に①のパターンが少なかった。

【考察】同じ誤信念課題の誤答者であっても、前提確認質問に全て正答しながら再質問に誤答するパターンが、定型発達児と異なり自閉スペクトラム症児特有なものである可能性が示された。一方、定型発達の年中児にも同じパターンが一定みられ、これが発達の遅れである可能性も残され、今後の検討が必要である。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 別府哲	4. 巻 60 (7-8)
2. 論文標題 自他理解と発達障害支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 22(3)
2. 論文標題 障害のある子どもとのかかわり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 39 (2)
2. 論文標題 高機能自閉スペクトラム症幼児における情動調整の障害と発達	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 58 - 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.20789/jraps.39.2_58">https://doi.org/10.20789/jraps.39.2_58</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 22 (3)
2. 論文標題 障害のある子どもとのかかわり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 180 - 183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 628
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児者の心の理解 - ユニークな心の理解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 みんなのねがい	6. 最初と最後の頁 14 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 629
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児者の心の理解 - 直観的心理化のユニークさ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 みんなのねがい	6. 最初と最後の頁 14 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別府哲	4. 巻 56
2. 論文標題 ユニークな世界を共有する - 自閉スペクトラム症の理解と支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 323-328
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.5926/arepj.56.315">https://doi.org/10.5926/arepj.56.315</a>	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 別府哲・工藤英美・加藤義信
2. 発表標題 誤信念課題に誤答する自閉症児の前提確認質問への不思議な反応傾向 定型発達児との比較を通して見えてきたこと
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 別府哲・工藤英美・加藤義信
2. 発表標題 前提確認質問を通してみた誤信念課題の不思議 - 自閉症児の場合 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 別府哲・工藤英美・加藤義信・成田民子
2. 発表標題 ASD幼児の多義図形理解は定型発達児と同じか違うか？
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 別府哲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 全国障害者問題研究会出版部	5. 総ページ数 143
3. 書名 自閉スペクトラム症児者の心の理解	

1. 著者名 別府哲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 136
3. 書名 「自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価2」三木裕和・越野和之・障害児教育の教育目標・教育評価研究会 編著（情動的共感を教育目標に - 強度行動障害の理解と実践、pp.20-35）	



1. 著者名 別府哲	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 196
3. 書名 「発達障害のある女の子・女性の支援－「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート（川上ちひろ・木谷秀勝・編著）別府哲（担当：分担執筆，範囲：発達障害のある女の子・女性の「こころ」からの理解と対応」】学童期の理解と対応（pp.41 - 49）	

1. 著者名 日本発達心理学会、藤野 博、東條 吉邦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 304(担当部分47-57)
3. 書名 自閉スペクトラムの発達科学(担当章「情動 - ユニークなスタイル：自動的処理と意識的処理」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	加藤 義信  (Kato Yoshinobu)  (00036675)	名古屋芸術大学・人間発達学部・名誉教授   (33913)	
研究 分担者	工藤 英美  (Kudo Hidemi)  (90803726)	愛知みずほ短期大学・その他部局等・講師（移行）   (43925)	